

中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究

A study of Medieval and the Early Modern Japanese Genre
Paintings by Iconological Method Their Archives of the
High Resolution Digital Images.

黒田 日出男 (Hideo Kuroda)

立正大学・文学部・教授



研究の概要

日本中近世に制作された風俗画のうち代表的な作品について高精細画像を作成、デジタル化し、独自に開発した高精細画像ビューワーに搭載する。そして、それらを分析・読解して高精細デジタル画像データベースを構築し、絵画史料研究の基盤の質的飛躍を目指すと共に、絵画史料学の研究水準を引き上げ、新たなイメージ史研究を目指す。

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学

キーワード：日本史

1. 研究開始当初の背景・動機

本科研は、日本中近世につくられた膨大な風俗画が歴史のイメージを研究する上で最良の史料であることに着目したものである。しかし、それらの風俗画は、横に伸びる絵巻や六曲一双の屏風のように巨大な画面であるため、画面に描かれた図像類の精密な観察と分析、熟覧と研究には、多くの困難があった。したがって従来の絵画史料学的研究では、市販されている絵巻物全集や大型図録に頼るしかない場合が多く、研究の質的飛躍のための基盤を整備する研究が求められていた。

2. 研究の目的

本科研では、第一に、高精細画像ビューワーに、風俗画作品を取り込む作業を積極的に行ない、それらの風俗画の高精細デジタル画像を、絵画史料学的に分析・読解する研究に提供する。また、これらの高精細デジタル画像は、絵画表面の微妙かつ繊細な状態の観察が可能なので、その分析によって作画技術の解明や修補の状態を解明する可能性もでてきた。

第二に、この高精細画像ビューワーを、ひろく研究者一般の利用に供するための基盤整備も目指す。これは基盤研究の根本的な使命であると考えている。また、研究者の作品に対する視覚的経験を根本的に変え、これによって研究者の視野や分析方法、発想などに質的に格段の変化が生れるであろうことを目指している。

3. 研究の方法

(1)中近世風俗画を、8×10 カラーポジフィルムをふんだんに用いて撮影し、高精細デジタル画像化する（場合によっては所蔵者の所有する4×5 カラーポジを借用するなどして経費の節減に努めることもある）。科研費で購入したワークステーション、スキャナーなどを用いてデータ化したり、デジタル画像処理を行なうが、技術的・時間的に処理しきれないような大きなデータや精密な画像処理を必要とする場合は、専門メーカーに依頼する。

(2)それらの高精細デジタル画像化した絵画史料を研究するための、研究者にとって使いやすいビューワーと画像データベース構築・検索機能をもったプラットフォームのシステムを開発している。

(3)上記のポジフィルムからデジタルデータ化した高精細画像を、同じく上記の高精細画像ビューワーに取り込む。高精細デジタル画像化した絵画史料の幾つかについては、その高精細デジタル画像データベース構築を行なうことにより、高精細デジタル画像を活用した絵画史料研究の実践例の提示を行う。

(4)(2)のソフトを歴史学、建築史学、美術史などの研究分担者・協力者で共有し、研究会などの場で、報告・議論し、さらにはその成果をデータベース化する。

(5)(2)(3)を所蔵者や公共の研究機関などで一般公開し、あるいは所蔵機関の研究者と共同研究の資源とすると共に、さらに研究を深めて、その成果を一般公開する。

以上により、研究基盤を質的に上昇させ、それらを、今後、研究者・院生・学生、教育関係者、教育・研究機関、美術・歴史愛好家等と共有できるようにしたいと考えている。

4. これまでの成果

(1) 高精細画像ビューワー “Pictionary” の開発はほぼ終了した。ピクショナリーは巨大な TIFF、PCD、BMP、JPG 形式などの画像を特殊な圧縮方法でファイル変換し、画面の座標に同期してテキスト情報を書き込みデータベースを構築するプラットフォームであり、同時にその検索を可能としたソフトとして、非常に高い完成度と操作性を実現しつつある。

(2) これまでに、①『日蓮聖人註画讃』（絵巻、本圀寺蔵）②『大坂夏の陣図屏風』（屏風絵、大阪城天守閣蔵）③『洛中洛外図屏風』（屏風絵、林原美術館蔵）④同上（屏風絵、米沢市上杉博物館蔵）⑤同上（歴博甲本、屏風絵、国立歴史民俗博物館蔵）⑥同上（歴博乙本、屏風絵、同上）⑦同上（屏風絵、岐阜市歴史博物館蔵）⑧『江戸図屏風』（屏風絵、国立歴史民俗博物館蔵）⑨『江戸天下祭図屏風』（屏風絵、個人蔵）などについて、精細デジタル画像化を終了している。これらの豊かな研究資源は、所蔵機関と協議して、公開のための条件を整えていくことになる。

(3) ①は、現在、専用の研究用プラットフォームの開発を終え、科研事務局と立正大学仏教学部との共同でデータを構築中である。科研終了後、同大学等での一般公開を行うため、現在、調整をはじめている。②は試験的なデータの構築を終了した上で、同天守閣学芸員との共同研究を遂行中である。③はデータベースの基礎データを生成し終え、現在調整中である。2008 年後半～2009 年中には所蔵館等にて一般公開を実現するべく、所蔵期間などと調整中である。④・⑦は共同研究を 2008 年度から始めるべく、所蔵館と本科研とのコンセプトデザインや作業分担、一般公開の方向性などについて調整中である。

(4) ②の分析・読解とデータベース構築を進めるには、戦国合戦に関する良質な文献史料を選択して、戦国合戦語彙データベースを構築することが不可欠である。現在、『甲陽軍鑑』などの書誌学的・文献学的な検討などを進めている。

(5) 以上の作業には歴史学、建築史学、美術史などの若手研究者、院生等の参加と支援を得ている。彼らと共に、データベース構築及び画像データの加工などを試みており、研究成果を共有しつつ、彼ら若手研究者・院生らを育成している。

(6) 肖像画の人物表現も風俗表現の重要な一部分を占めているので、例えば、神護寺蔵『伝 源頼朝像』のイメージを再考察するプロジェクトの一環として、甲斐善光寺所蔵の『源頼朝像』（木彫）をもとに、源頼朝の生前の面貌を復元することなども試みた。その成果の一端は、NHK 総合テレビのニュースで採り上げられている（2007 年 1 月 7 日放映）。

5. これまでの進捗状況と今後の計画

(1) 研究資源として作成した高精細デジタル画像は、科研終了後の一般利用を視野に入れて、その公開の条件や手順について所蔵者と検討を開始している。

(2) 所蔵機関である博物館・美術館の研究者との共同研究の成果を、本科件で開発した “Pictionary” を用いてデータベース化し、一般公開するための手段や方法などについても検討を開始している。高精細デジタル画像を活用した展示やシンポジウムの計画などを考えているところである。

(3) 今後も、各種の中近世風俗画の撮影と高精細デジタル画像化を推進し、研究資源を可能な限り増やしていく予定である。

(4) 前述 4 (6) の神護寺蔵『伝源頼朝像』について、研究代表者である黒田日出男が研究成果を公刊する準備に入っている。

6. これまでの発表論文等

（研究代表者は太字、研究分担者には下線）
黒田日出男「甲陽軍鑑をめぐる研究史—『甲陽軍鑑』の史料論(1)—」（『立正大学文学部論叢』124、2006 5p-74p）同上「桶狭間の戦いと『甲陽軍鑑』—『甲陽軍鑑』の史料論(2)—」（『立正史学』100、2006 3p-42p）玉井哲雄「特集 城郭と復元 建築史学の現場から」（『文化遺産の世界』23、2007 10p-13p）杉森哲也「IV 京都の町々」（『史料を読み解く—近世の村と町—』2、2006 85p-112p）藤川昌樹「高野山の山内空間と建築」（『高野山と密教文化』1（高野山大学選書/小学館スクウェア）、2006 106p-117p）米倉迪夫『源頼朝像—沈黙の肖像画』（増補版）（平凡社ライブラリ）、2006）

ホームページ等
なし